

クティブを自分自身の中に取り入れ、組織化されたパースペクティブを形成していく。中国人は中国社会から獲得したパースペクティブに基づいて、「知覚し、思考し、種々の判断を下し、自らを統制する」(Shibutani 1955=2013: 7)。日本人は日本社会から獲得したパースペクティブに基づいて、周囲を定義し、自己統制をする。例えば、同じ様式の手紙用紙を渡されても、日本人は縦書きにするが、中国人は横書きにする。それぞれ異なるパースペクティブを持っているため、同じ環境に直面するときに、異なる事柄に目を向けることになる。たとえば、ある集団の功績を評価するときに、日本人は共同作業の貢献を重視するのに対し、中国人は個人の貢献を重視する。また、中国人と日本人は異なるパースペクティブを持っているため、同じ状況を別様に解釈し、異なる反応を示す。例えば、中国人同士の話を見た中国人が「仲良く話しているね」と考えた場合でも、日本人からすれば「喧嘩しているんじゃない」と思う可能性がある。このように、中国人と日本人はそれぞれ、自国の領域の中で、自国のパースペクティブに基づいて定義し、行動している。自分を取り巻く環境を安定したもの、秩序立ったもの、予測可能なものとして捉えることができる。ある中国人あるいは日本人は、何らかの機会を通じて、相手の国の文化に接触でき、それを自分自身の中に取り入れた場合、その人のパースペクティブに変化が生じ、自分を取り巻く環境を新たなパースペクティブで定義し、以前に見落としていた事柄に気づくようになる、あるいは自分を取り巻く環境を異なる観点から解釈するようになる可能性もある。たとえば、日本人にとって、刺身を食べる文化があるのに対し、中国人にとって、肉や海鮮は生で食べられるものではない。しかし、日本に行った中国人、あるいは何らかのマスメディアを通じて、自国にいながらも日本の刺身文化に接触できた場合、中国人のパースペクティブに変化が生じ、肉や海鮮を生で食べるようになる可能性がある。「行為の試金石」という機能について、中国人と日本人は、それぞれ自国の文化から獲得したパースペクティブに基づいて、知覚したり、思考したり、周りの人の行動や事柄の傾向を予期したりする。またその予期に基づいて、自分の行動を抑制したりする。そのような予期と抑制の結果を、中国人は自国にいる他の中国人の反応から確認し、日本人は自国にいる他の日本人の反応から確認する。たとえば、「いいえ」を伝えたいときに、中国人は手のひらを相手に見せて左右に振る。それに対して、日本人は「いいえ」を伝えたいときに、手のひらを横にして手を左右に振る。中国人も日本人もそのジェスチャーを示した結果、他者は「いいえ」という意味を受け止めてくれると予測する。相手が自分と同じ国の人であれば、「いいえ」と理解することになるが、相手が自分と異なる国の人であれば、正確に「いいえ」と理解できるとは限らない。たとえば、日本人は「いいえ」を伝えたいときに、手のひらを横にして手を左右に振るが、相手は中国人であれば、「臭い」という意味で理解してしまうことになる。このように、相手の肯定的な反応を受けて、そのパースペクティブは強固なものとなるが、否定的な反応を受ければ、行為者は戸惑い、自分の行動の修正を試みることになる。

## 第2項 準拠集団から見た人々のトランスアクション—中国人同士、日本人同士、中国人と日本人とのトランスアクション

中国人と日本人は、それぞれ中国と日本を準拠集団として、それぞれ自国にいる他の国民とパースペクティブを分有している。それぞれの分有されたパースペクティブは中国文化と日本文化である。同じ文化の観点を持っている人は「共通のやり方の行為に従事する」。たとえば、大みそかに、日本人は年越しそばを食べるが、(旧暦だが)中国人は餃子を食べる。トランスアクションに参加しているときに、同じ国にいるすべての人は自国の文化の観点から思考し、他者の行動を予期したり、自分の行動を方向づけたりする。このように、「共通のやり方の行為に従事する」ことを確認することによって、お互いに相手のパースペクティブを支持しあっている。

異なるパースペクティブを持つ人々がトランスアクションに参加しているときに、共同行為できるのは、「一般化された他者」の役割を取得しているからである。たとえば、中国人留学生と日本人の学生と一緒に授業を受ける場合に、「学生」という「一般化された他者」の役割をお互いに取得しているからこそ授業への参加が順調に遂行することができる。

人間は常に組織化されたパースペクティブに基づいて行動していることから、一貫性のある人間として見える。しかし、その一貫性がある反面、人間はあらゆる未知の状況に自らを向けるときでも、その組織化されたパースペクティブに基づいて思考したり、行動したりすることになる。たとえば、日本は左通行に対し、中国は右通行である。日本に旅行してきた中国人は、右通行というパースペクティブに基づいて思考しているため、自分が予定とする方向と逆方向のバスに乗ってしまうことになることもあるだろう。また、中国人にとって、餃子も麺も主食のため、一緒に食べることは考えられないが、日本に来て、餃子と麺のセットを見たら、カルチャーショックを受けるだろう。

## 第3項 近代社会における準拠集団理論の必要性

シブタニによれば、近代大衆社会において、個人は自分が成員とみなされていない集団、直接参加していない集団、時には実際存在していない集団を準拠集団にしている可能性がある。たとえば、日本の文化が好きな中国人は日本のアニメにはまり、コスプレをする。また近代大衆社会の文化の多元化・多様化により、個人は多様な集団に接する機会が増え、各々複数の様々なパースペクティブを内面化している。たとえば、日本では、敬語を使うことによって、常に人との親疎関係を意識しているが、中国には、敬語がなく、初めて会った人とでも長年の知り合いのように話すことができる。日本に長年滞在している中国人がこの両方のパースペクティブを内面化していれば、人との親疎関係をはかるときに、たまに困惑を覚えることもあるだろう。このように、複数の様々なパースペクティブを内面化していることは個人にジレンマをもたらすこともある。

#### 第4項 異文化適応における準拠集団理論の有用性

シブタニによれば、パースペクティブの獲得において、コミュニケーション・チャンネルが極めて重要である。「共通のパースペクティブ—共通の文化」は、「共通のコミュニケーション・チャンネルに参加することを通じて生まれる」(Shibutani 1955=2013: 8)。それと同様に、異なるパースペクティブ(文化)をもつ人々も必ず異なるコミュニケーション・チャンネルに接触している。たとえば、「検索バー」において、日本はGoogleやYahooを使うが、中国ではBaiduを使う。またSNSにおいて、日本は主にLINEやFacebookなどを使うが、中国ではQQやWechat、Weiboを使う。多くの日本人はBaidu、QQ、Wechatなどの存在すら知らない。中国人は政府によって、LINEやFacebookなどを遮断されている。このように部外者から距離を置くために、しばしばその成員は意識的にも無意識的にもコミュニケーション・チャンネルを制限したり制限されたりすることもある。

高速輸送手段やマスメディアの発達によって、コミュニケーション・チャンネルは数多くなり、コミュニケーション・チャンネルに参加することも容易となった。近代社会において、移民や留学する人々も増えていて、異国に行くことによって、他国のコミュニケーション・チャンネルに容易に接触することができ、他国のパースペクティブを内面化することもある。

他国のパースペクティブを内面化することは、その国への適応において極めて重要である。ここまで日本と中国の多様な面におけるパースペクティブの違いを述べてきたが、日中文化において最も大きな違いは時間感覚に関する違いである。中国人が日本に留学した際に、日本人の時間に関するパースペクティブを内面化することは、日本社会への適応においてきわめて重要である。次節では、中国人が実際に時間観念における日本社会への適応過程の中で、準拠集団がどう作用しているのかを考察していく。

#### 第5節 準拠集団論からみた日本文化としての「時間厳守」

すでに第1章第3節で述べたように、日本と中国は文化的に多様な面において異なる。その中でも時間感覚、言い換えれば、時間に関するパースペクティブという文化的差異が顕著である。それぞれの国の領域で、人々はそれぞれの時間に関するパースペクティブに基づいて行動する。近代大衆社会において、その地理的領域の障壁が無効化されるにつれて、異なる時間に関するパースペクティブを持っている日本人と中国人の社会的相互作用も増えてきた。それによるコンフリクトが生じることもある。コンフリクトのない相互作用を行う唯一の方法は、片方あるいは両方の国にいる個人が相手の国の時間に関するパースペクティブを取得することにほかならない。在日中国人の場合、日本で順調な生活を送るためには、日本の時間に関するパースペクティブを取得しなければならない。

日本にいる日本人は、日本を準拠集団として、他の日本人とパースペクティブを分有している。それを時間感覚について言えば、日本にいる日本人は同じ時間に関するパースペクティブを分有している。共通の時間に関するパースペクティブに基づいて行動している。

また、他の日本人も自分と同じ時間に関するパースペクティブを持っていると考える。そのような共通のパースペクティブを持っている日本人は「共通のやり方の行為に従事する」(Shibutani 1955=2013: 6)。すなわち、長期計画を立てる、カレンダー通りに行動する、時間厳守、事前に予約をするなどである。そして、「共通のやり方の行為に従事する」ことを確認することによって、お互いに相手の時間に関するパースペクティブを支持し合っている。

同じように、中国にいる中国人は、中国を準拠集団として、他の中国人とパースペクティブを分有している。時間感覚について言えば、中国にいる中国人は同じ時間に関するパースペクティブを分有している。共通の時間に関するパースペクティブに基づいて行動している。また、他の中国人も自分と同じ時間に関するパースペクティブを持っていると考える。そのような共通のパースペクティブを持っている中国人は「共通のやり方の行為に従事する」(Shibutani 1955=2013: 6)。すなわち、短期計画を立てる、臨機応変に行動する、時間に厳しくない、突然訪問するなどである。そして、「共通のやり方の行為に従事する」ことを確認することによって、お互いに相手の時間に関するパースペクティブを支持し合っている。

中国人は中国の時間に関するパースペクティブを有していて、常にその組織化されたパースペクティブに基づいて行動する。「いったん人間がその集団から特定の見地を取り入れると、それはその人の世界に対する適応方針となり、その人はこの準拠枠をあらゆる未知の状況に向けることになる」とシブタニが述べているように(Shibutani 1955=2013: 7)、来日し、日本のパースペクティブを取得していない中国人は、日本社会という未知の状況に直面するときでも、依然として中国の時間に関するパースペクティブに基づいて思考したり、行動したりする。それに対し、日本にいる日本人は日本に関するパースペクティブに基づいて思考したり、行動したりする。そのようなお互いに相手のパースペクティブを取得していない日本人と中国人が社会的相互作用を行う際に、コンフリクトが発生することはまず避けられない。

シンボリック相互作用論の社会化論は、人間を主体的な存在と捉える発想をその根底に持っている。つまり、来日した中国人はコンフリクト(問題状況)を経験することによって、自分が持っている時間に関するパースペクティブについて思考したり、修正したりすることになる。日本での滞在期間が長期的な場合、来日した中国人は日本社会に適応しようとする。その際に、自分自身が参与している日本社会の個人あるいは集団から、時間に関するパースペクティブを獲得する。その個人あるいは集団がその行為者にとって準拠集団となる。準拠集団から獲得したパースペクティブを通して、その環境(社会)に存在する他者たちと社会的相互作用を行い、同時に自分自身とも相互作用を行う。この二つの相互作用のなかで、その適応を達成していく。

日本人が日本の時間に関するパースペクティブ—長期計画を立てる、カレンダー通りに行動する、時間厳守、事前に予約など—に基づいて行動するとき、重要な役割を果たし

ているものがある。それが「手帳」である。多くの日本人は常に手帳を持ち歩く日々を暮らしている。手帳は日本で集団生活をしていく上で、欠かせないものといっても過言ではない。また日中の時間感覚の違いをよく表している。辞書による「手帳」という言葉の中国語の訳語は“記事本”である。中国語の“記事本”という単語が表しているものはカレンダーのない単なるメモ帳である。機能的にはスケジュールを書くというより、メモをするために使うものである。当然、いくつかの“記事本”を持つことがよくあるが、つねに“記事本”を持ち歩くことはほとんどない。つまり、中国では「手帳」という言葉にぴったり当てはまる言葉は実はないということである。実際に中国では手帳を使う人もほとんどおらず、そもそも手帳が売られてもいない。しかし、来日した中国人の多くは「手帳」を使うようになる。中国人が日本社会に適応しようとする際に、特に時間に関するパースペクティブを取得しようとする際に、「手帳」が重要な役割を果たしていると考えられる。

#### 小括

第2章では、社会学、中でもシンボリック相互作用論から見た社会化論の観点を明示した。社会学において、社会化とは、一般的に「無力な存在の幼児が、他の人間との接触を通して、徐々に自己自覚し、理解力をもった人間になり、所与の文化の習わしに習熟するようになる過程」である。大別して「第1次社会化」と「第2次社会化」に分けられる。第1次社会化は幼児期から児童期にかけての時期であり、主に言語と基本的行動様式を習得する。第2次社会化は児童期後半から成熟期にかけての時期であり、主に文化の様式を構成する価値や規範、信念の習得を行う。在日中国人の日本社会への適応過程は第2次社会化として捉えられる。社会学における社会化論は大別して、「機能主義的社会化論」と「相互作用論的社会化論」に分けられる。前者は「規範的パラダイム」に基づいて作られ、後者は「解釈的パラダイム」に基づいて作られている。前者の社会化論において人間とは、社会から価値や規範を一方向的に埋め込まれる受動的な存在と捉えられているのに対して、後者の社会化論においては、人間は、自らの環境的に適応するために、積極的かつ選択的に価値や規範を自らのうちに取り込み、それらを必要に応じて再構成する存在であると捉えられている。相互作用論的社会化ないしは解釈的パラダイムの社会化は、一般に「意味学派」として括られる、現象学的社会学、シンボリック相互作用論、エスノメソドロジーによって展開されてきた。本論では、後者の社会化のうち、「シンボリック相互作用論」による社会化論に依拠して論を展開した。

シンボリック相互作用論の社会化論は、人間を主体的な存在と捉える発想をその根底に持っている。人間はある特定の環境（社会）に適応しようとする。その際に、その環境（社会）からある一定のパースペクティブを獲得する。その環境（社会）がその行為者にとって準拠集団となる。パースペクティブとは行為者によって自明視されているものの見方や考え方である。準拠集団から獲得したパースペクティブを通して、その環境（社会）に存在する他者たちと社会的相互作用を行い、同時に自分自身とも相互作用を行う。行為者と

は、この二つの相互作用のなかで、その適応を達成しようとする存在である。シンボリック相互作用論において、社会化のプロセスの中で行為者がどの集団を準拠集団としているのかという問題は非常に重要である。シンボリック相互作用論には数多くの論者が存在するが、本研究では、その提唱者であるハーバート・ブルーマー、その直弟子にあたるタモツ・シブタニ、我が国の代表的な論客である船津衛、この三者の諸説を基に分析を行った。その中でも、主にシンボリック相互作用論において準拠集団論を展開した古典的な論考であるシブタニの「パースペクティブとしての準拠集団」に依拠し、分析を行った。

シブタニは準拠集団という言葉を用いて「行為者によってそのパースペクティブが自明視されている集団」（そのパースペクティブが行為者の準拠枠を構成する集団）に限定して用いるべきだと主張していた。準拠集団は「パースペクティブの獲得源」と「行為の試金石」という二つの機能を持っている。同じ集団を準拠集団としている人々はパースペクティブを分有している。そのような分有されたパースペクティブはその集団の文化となる。ある集団に分有されたパースペクティブ（文化）の観点を持っているその集団の成員が皆「共通のやり方の行為に従事する」ことになる。集合的なトランスアクションに参加する中で、分有されたパースペクティブに基づいてお互いに相手の行動を予期し、お互いのパースペクティブを確認し合い、お互いに相手のパースペクティブを支持しあう。それに対し、異なったパースペクティブを持った人々が社会的相互作用を行う際には、衝突が起こり得る。衝突のない社会的相互作用を行うためには、その社会的相互作用を行っている片方もしくは双方がお互いに相手のパースペクティブを取得しなければならない。「共通のパースペクティブ—共通の文化」は、「共通のコミュニケーション・チャンネル」に参加することを通じて生まれる。現代大衆社会において、数多くのコミュニケーション・チャンネルが存在することとそれらに参加することの容易さによって、地理的には散在している人々が同じ文化を持ち、また同じ地理的領域に住む人々が異なる文化を持つ状況が作り出された。さらに、個人は多様な集団に接することが増え、各々複数の様々なパースペクティブを内面化していて、時に個人の中のジレンマをもたらすこともある。そのような場合、行為者はしばしば準拠集団の選択という問題に直面する。準拠集団の選択は「個人の対人関係の関数」である。つまり、どの集団を準拠集団にするかは、その集団に属している他者との関係に依存する。

本章では、上記のシブタニの見解に依拠しつつ、日中文化の相違点、中でも「時間感覚」に関するパースペクティブの違いについて、詳細な対比と分析を試みた。その結果として、「手帳」というツールが、両文化の上記のパースペクティブの差異を象徴する着目点になりうる可能性を指摘した。

### 第3章 中国人による手帳の活用実態：調査結果の分析を基に

#### 第1節 「手帳」：その一般的な使われ方

「手帳」の歴史は長いが、その正確な起源をたどることは難しいと言われている。ローマ時代のヨーロッパには手帳に関する記録があり、将校や貴族のステータスの象徴として使われていたと言われている。日本において、手帳に関する最初の記録は、明治12年であり、大蔵省印刷局が「懐中日記」という手帳を職員向けに製造していたと言われている。その後一般的に民間向けの製造が始まった<sup>15</sup>。

現在日本において普及している手帳はおおよそ四種類に分けることができる。「綴じ手帳」、「能率手帳」、「ほぼ日手帳」と「システム手帳」である。現在日本で普及している手帳の中で最も古い歴史を持っているのは「綴じ手帳」である。あらかじめ製本されていて、シンプルで使いやすく、丈夫でコンパクト、値段も手頃というのが「綴じ手帳」の特徴である。現在手帳はメモ機能よりもスケジュール管理や計画立案に重点を置いているものが多い。それはごく当たり前のように見られるが、そのルーツは「能率手帳」と言われている。最も典型的な書式として左のページに時間目盛り入りの週間スケジュール記入欄があり、それに合わせて、右ページには自由に記入出来るメモ欄があるという構成になっている。これまで紹介した「綴じ手帳」と「能率手帳」に「楽しむ」という要素を加えたものが「ほぼ日手帳」である。一日あたり一ページの構成になっていて、スケジュールや関連メモ、ToDoリストなども自由に書き込むことができる。さらにほぼ日手帳にはちょっとした読み物がある。その読み物は有名人による名言や迷言であったりする。「システム手帳」はあらかじめ製本されている綴じ手帳に対し、手帳の中身を自由に差し替えることが出来るものである。上記の四種類以外にも、県民手帳、専門職業家向け手帳など多様な種類がある。

また記入方法によっても、月間カレンダー式、見開き1週間レフト式、見開き1週間セパレート式、パーチカル式、一日一ページ式と分類することができる。

手帳は日本社会において、非常に普遍的なアイテムとして存在している。小学生からお年寄りまで、各年齢層向けに多様なデザインの手帳がある。各職業向けの専用の手帳もある。また各都道府県の行政が販売している県民手帳もある。多様な需要を満たすための多様な手帳は毎年年末年始に、書店やコンビニ、スーパーなどで売られている。日本人の大半は手帳を使用している。日本社会において、特に仕事上においては、手帳は必要不可欠なアイテムだと言われている。さらに、近年は「手帳」をテーマとする雑誌、新聞のコラム、書籍もある。手帳を使いこなすための文房具（シール、スタンプ）なども登場している。

<sup>15</sup> 手帳の歴史・使い方・選び方

<https://archive.is/4PuLr> Accessed: 2016年1月30日 02:39:21 UTC.

筆者が手帳を初めて目にしたのは中国で日本語を勉強していた時期であった。日本で放映されているドラマには「小さなノートブック」（「手帳」）を持って他人と予定を合わせるシーンが数多く見られた。なぜそういう細かなところに目を向けたのかと言えば、中国にはそういう「小さなノートブック」を持って他人と予定を合わせる場面がないからである。そういう「小さなノートブック」（「手帳」）の存在すら筆者は知らなかった。中国には手帳がなく、当然手帳を使う人もいない。第1章第3節で述べたように、中国では主に短期計画であるため、日程を頭で覚える人が多い。手書きにする人もいるが、非常に大切な用事がある時に限り、常に持ち歩きできないカレンダーに記載するか普通のメモ帳に書くのが通常である。しかし、来日後の中国人の大半は、手帳を使うようになる。そこで、手帳を使用しないという状態から手帳を使用するという状態への変化は、来日した中国人の日本社会への適応であると筆者の目に映った。言いかえれば、手帳を介した日本社会（主に時間感覚）への適応という仮説を筆者は立てた。

この仮説を実証するために、鹿児島にいる（いた）留学生と元留学生に調査を行うことにした。調査に入る前に、まず「手帳」の一般的な使われ方について調べることにした。『仕事の教科書—vol107. 究極の手帳術』、『OZ plus—vol140. とびきりの手帳の活用術』、『Oggi』（第24巻第1号）という、手帳に関する内容が書かれている三冊の雑誌を基に、その内容を以下のように整理した。

『仕事の教科書—vol107. 究極の手帳術』<sup>16</sup>の中では、全国の20～50代のビジネスパーソン100名を対象にした手帳に関する調査（2014年9月1日～9月3日、アイリサーチ調べ）がある。その調査項目の中に、手帳の主な用途に関する項目がある。回答数の統計から、手帳の使用用途は、一位「スケジュール管理」、二位「タスク管理」、三位「ライフログ」、四位「目標達成」、「その他」という順位になっている。そして各使用用途の回答をした調査対象者の実際の使用事例も詳しく挙げている。一位の「スケジュール管理」と回答した調査対象者の中には、日程を黒一色で書いている人もいるが、色分けや、付箋、シール、スタンプなどを活用し、日程を管理している人もいる。たとえば、「休」というスタンプを使い、休日を分かりやすくする。シールの色分けで週の偏りが一目で分かるようにしているものもある。二位の「タスク管理」とは、言いかえれば「ToDoリスト」のことである。この使用用途に関しても色分けや、付箋、シール、スタンプなどの活用事例があった。たとえば、クリアしたら「済」スタンプを押す。三位の「ライフログ」に関しては、「ただ忘れ去って行くことを書くことで防ぐ」ような読書や勉強のメモをしたり、日記を書いたり、写真や雑誌の切り取りを貼るような趣味のメモをしたりする事例があった。四位の「目標達成」に関しては、ダイエットの目標を書くなどの事例があった。

『OZ plus—vol140. とびきりの手帳の活用術』<sup>17</sup>は、手帳を「自分手帳」と定義している。「自分手帳」が意味しているのは「手帳」がその持ち主の分身であるということである。紹介

<sup>16</sup> 『仕事の教科書—vol107. 究極の手帳術』（学研パブリッシング、2014年）、7～23頁参照。

<sup>17</sup> 『OZ plus—vol140. とびきりの手帳の活用術』（スタート出版、2015年）、18～57頁参照。

されていたのは、手帳の見た目（カバーや表紙）、スタンプ、シールなどを使い、「楽しく」手帳を使う事例、夢や悩みを書くことで自分自身と向き合う事例、感想やヒントを書きとめる事例、イラストやスクラップでアレンジする事例、ポジティブな言葉で自分自身を応援する事例、過去・現在・未来を手帳に連ね、「どうありたいか」をイメージする事例などが挙げられていた。約言すれば、趣味、アクセサリーを施すこと、夢や目標を書くこと、メモをすること、自分を鼓舞する言葉を書くことなどで自分自身を表現する、あるいは作り上げていく。このような「自分手帳」を「毎日手帳」と「未来手帳」に分類し、それぞれの分類にインタビューによる事例を挙げている。「毎日手帳」は主に日程管理に使うとのことである。日程管理を色分けや、付箋、シール、スタンプなどを活用し、分かりやすく、あるいは「楽しく」するような事例もあった。また「未来手帳」では、夢の実現、資格の取得、目標の達成など未来に向けた計画を書く事例があった。

『Oggi』<sup>18</sup>には仕事をしている女性13人のインタビュー取材があった。「手帳」に関する取材内容を簡潔にまとめると次のようになる。まず第一に、日程管理が挙げられる。第二に、メモ、すなわち仕事、勉強、料理や美容知識などをメモすることが挙げられる。第三に挙げられているのが、日々を書きとめた「気づき」（日記も含めた）である。あえて日記帳ではなく、手帳に書くのは「書けるときに書く」との理由からで、そうした「気づき」は自分を知るためのヒントになるとのコメントがあった。第四に、夢や目標がある。夢や目標を文字化することがその実現につながるとのコメントがあった。第五は、マインド整理である。メモ、日程、「気づき」を文字化し、マインドマップを作ることによって思考を明瞭にするとのことである。最後に、「アレンジすること」である。イラストや写真、スタンプ、シールなどを使い、シンプルな手帳を「見て楽しい」手帳にするためにアクセサリーを施すとのことである。

以上の三冊の雑誌の内容を踏まえると、「手帳」とその一般的な使い方に関する大まかなイメージを形成することができる。すなわち、「手帳」とは過去・現在・未来を連ねる自分の分身である。人生の記録であり、行動指針であり、未来に向けてのまなざしでもある。また生活を多彩にする道具でもある。それを基に、手帳の一般的使われ方は「過去・現在・未来・楽しみ」と分類することができると思われる。「過去」とは、①日記をつける、②感想、心情、ヒントを書きとめるという使い方である。「現在」とは、③スケジュール管理すること、④メモをすること、⑤自分自身を鼓舞する言葉を書くことという使い方である。「未来」とは、⑥計画を立てること、⑦夢や目標を文字にするという使い方である。「楽しみ」とは、⑧趣味の採録、⑨イラスト、シール、スタンプ、付箋を使うことでアクセサリーを施すという使い方である。

以下本章においては、上述の「手帳」の一般的な使われ方を踏まえた上で、中国人留学生・元留学生に対する調査結果の説明と分析を行いたい。

<sup>18</sup> 『Oggi』（小学館、2014年）第24巻第1号、146～151頁参照。

## 第2節 調査の概況

調査対象者は鹿児島にいる（いた）留学生と元留学生20人である。対面あるいはインターネットを通じてのインタビューを行った。調査は二回の期間にわたって行われた。第一回目の調査期間は、2014年7月9日から2014年10月3日までと2015年1月25日から2015年2月11日までとなっている。第一回目の調査は主に調査対象者の手帳の使い方に関して行われた。その後、手帳を使うことは中国人の日本社会への適応とその過程におけるパーソナリティの変容にどのような作用を及ぼしているかを明らかにしたいと考え、2015年5月16日から2015年12月14日までの間に、調査対象者の8名（Bさん、Cさん、Dさん、Hさん、Jさん、Mさん、Nさん、Tさん）に追加インタビューを行った（20名の調査対象者のうち、追跡調査が可能となった人数は8名である）。

インタビューの項目は、以下のようにになっている。

- ①氏名、性別、年齢、職業
- ②来日した時期
- ③手帳を使っている（いた）かどうか
- ④手帳の使用開始時期
- ⑤手帳を使い始めた理由またはきっかけ
- ⑥手帳の使い方（日程管理、日記、アクセサリー、励ます言葉、計画などの使い方を提示）
- ⑦手帳を使った後の処理（保管または破棄）
- ⑧調査対象者の留学生活における手帳の位置づけ（第二回目の調査での追加項目）

## 第3節 調査対象者の属性

調査の具体的な分析に移る前に、インタビューに応じた調査対象者の属性について説明したい。なお、使用するデータは、筆者のインタビュー調査に基づくものであり、以下本章で提示される分析もそのデータに基づいている。

調査対象者は合計22名であり、性別による内訳は男性11名、女性11人名である（図3-1）。本研究の調査対象者は鹿児島にいる（いた）留学生と元留学生であり、図3-2が示しているように、調査対象者は主に20代前半であり、20代後半の調査対象者が3人、30代の調査対象者が1人となっている。法務省の在留外国人統計によれば、日本に住む中国人の男女比は43対57であり、また20代の男女が最も多い（図3-3）。性別の内訳からも年齢の内訳からも、今回の調査対象者は在日中国人の状況を反映していると言える。